

## 祭祀組織と村落構造

### — 旧堤並庄を中心とする中国山地の実態 —

岡山大　米　村　昭　二

近世に入ると、かつて花園制といふエールに蔽わっていた村落が歴史の表面に登場し、氏神を村落生活の中核とし、シンボルとするに至つた。

しかし、後進地域に属する岡山県北部の中国山地では、名を構成単位とする祭祀組織がかなり残存していた。元禄四年の作陽誌によると、美作一円の三十六社のうち一村氏神が一八四社（五八%）あるのに対して、庄氏神一八社、郷氏神八社を数えている。知見の限りでは、そのうちの一五社は名を祭祀組織の基礎単位としている。

もともと、祭祀組織は、それ自体極めて伝承性が強く、変化を受け入れない伝統の容器といわれる。このことが、中国山地の後進性とあいまつて中世的な祭祀組織を今日に持越したものと考えられる。

しかし、近世村落の自立にともなう名の分解に応じて、名を構成単位とする祭祀組織も村落単位に再編成されて村落の連合体的組織へと近世的変容を遂げていった。

しかも、中国山地の村落は、同族日株内を主要な構成単位としていたことから、單一同族支配型、複数同族支配型といった構成型態をとり、それがそのまま祭祀組織に投影され、その支柱となつて行った。いうまでもなく、同族は、超世代的な本来の系譜関係をもち、それ故に同族関係は安定度が高く、その内部秩序も容易に変化を受け入れない。したがつて、同族組織を基盤とする祭祀組織も安定度が高く、それによって旧慣を保持しつつ持続して来たといふことができる。

ここでは、そうした名単位の祭祀組織を村落構造と関連させて近世以降今日に至るまでの変化を問題にすることにしたい。ただ、大学紛争のため、史料を十分整理するだけの時間的余猶がなく、問題点も多く残されているが、すでにとりあげた旧堤並庄の祭祀組織を中心に論議を開くことにしたい。